

個性豊かな弥生文化

—南関東と近畿を比較する—

禰宜田佳男 (大阪府立弥生文化博物館)

はじめに

縄文時代・古墳時代の遺跡が世界遺産登録され、その狭間に位置する弥生時代は…

1 いま、弥生時代は「ややこしい」ことになっている

(1) 弥生時代研究を振り返る

弥生時代研究は関東ではじまった

○1884年 東京大学裏手の「向ヶ丘弥生町」の貝塚で土器発見、その後弥生式土器と命名(第1図)

○1904年 弥生式土器は石器時代と古墳時代の間に入る性質をもつ

先住民は縄文式土器を使っていた民族、大和民族(=古墳文化を築く)が天孫降臨
弥生式土器を使う民族はどのような人々だったのか

○1917年 弥生式土器には青銅器・鉄器が伴う

先史原史両時代の間時代が存在

○1917年 堅穴から大量の焼米を発掘(福岡県岩崎ほか)、

○1925年 粃の圧痕のついた土器を発掘(榊形冢(マカガコイ)貝塚、宮城県)(第2図)

○1933年 東京考古学会編『日本原始農業』

弥生時代は稲作農業を生産基盤とする社会

研究の中心は西日本に

○1937年 唐古遺跡(現在の唐古・鍵遺跡、奈良県 史跡)の調査で木製農具の発掘

○1938年 小林行雄「弥生式文化」論文

戦前の弥生文化観の到達点、現在の弥生文化に通じる考え方、「稲と鉄の時代」

○1946年 登呂遺跡(静岡県 特別史跡)で弥生後期の集落と水田跡の調査

○1978年 板付遺跡(福岡県 史跡)で縄文晩期末の水田跡の調査(第4図)

○1980年 菜畑遺跡(佐賀県 史跡)で縄文晩期後半の水田跡の調査(時期に疑義もある)(第5図)

ふたたび弥生研究の情報発信は関東に

○2003年 国立歴史民俗博物館 弥生時代開始年代は500年遡及する(第3図)

○2019年 『再考「弥生時代」—農耕・海・集落—』の刊行

○2020年 雑誌『東京考古』で『再考「弥生時代」—農耕・海・集落—』特集

(2) 弥生時代は「稲と鉄の時代」だとは言えなくなっている

○稲をめぐる

・水田稲作は北部九州に伝播して、急速に列島各地に広がっていったわけではなかった
近畿には300年経過して伝播(受容)、南関東には700年経過して伝播(受容)

○鉄をめぐる

・弥生時代の前半期に鉄器は存在しない…、それで鉄器時代と言えるのか

(3) 弥生文化・弥生時代に関するさまざまな評価

○森岡秀人「真正弥生時代」

- ・弥生時代は、新石器文化の段階と金属器文化の段階に大別される一つの時代に対してこうした枠組みは有効なのか
- ・弥生時代を象徴する3要素「稲・金属器・戦争」のいずれもが弥生時代に普遍的でない
- ・弥生時代を表すのは中期だけで、その時期を「真正弥生時代」

○藤尾慎一郎「灌漑式水田稲作は弥生文化の指標なのか」

- ・環濠集落の形成、水田稲作に木偶や鳥形木製品を用いたイデオロギーの質的転換を重視
- ・灌漑式水田稲作を選択的生業構造の中に位置づけた上でそれに特化し、一端始めれば戻ることなく古墳文化へと連続していく文化

○設楽博己「農耕文化複合」

- ・弥生時代は「本格的な」農耕が始まった時代とし、その判断基準は、縄文農耕との違いである「農耕文化複合」の形成に求める。
弥生文化の農耕は水田稲作とアワ、キビの雑穀栽培からなる体系的なもの
弥生文化は様々な文化要素が連鎖的に農耕と関係している

○松木武彦「弥生文化の脱構築」

- ・時代概念は時間的に空間的にひとつのまとまりのあるもの
弥生文化は北部九州とそれ以外の地域で大きく異なり、「一国史」で議論するのが適切か

○石川日出志「弥生文化・弥生時代の定義を解き放つても、再構築する見通しはない」

- ・弥生文化は、灌漑稲作をもっとも基本的な要素としてもつ文化とし、縄文晩期文化から引き継いだ地域性とその後加わってできあがった多様な文化を弥生文化の地域性として認識
- ・縄文時代文化という森林性新石器時代文化から、古代史の世界ではヤマト政権の時代ともいう古墳時代の政治的社会的時代文化への変化の過程として弥生文化を理解するのが穏当であろうか

*ちなみに西洋史でも時代区分論が問題になっているようである（『思想』2020年1月号）

時代区分は単なる時期区分ではない

区分すべき理由が適切に設定される必要がある、到達できる認識目標も設定する必要がある

何が認識されるのかが重要で、何のための時代区分なのかを考える

一致した見解を得ることは困難

○弥生時代とは何か、弥生文化とは何か？

各地域の弥生文化の様相解明をする必要性

2 南関東（＝神奈川県）の3つの弥生時代遺跡

(1) 横浜市大塚遺跡（史跡）の概要（第6図）

○弥生時代中期後半の標高50m程度の丘陵上に所在する環濠集落

○長軸200m、短軸最大で130m、約2.3万㎡のなかに

- ・竪穴建物115棟、掘立柱建物10棟（以上）…一時期20～30棟

(2) 小田原市中里遺跡の概要（第7図）

○弥生時代中期中葉の低地に所在する大規模な集落と墓（いったん廃絶後、後期に再開）

○東西240m、東西220m、約5.2万㎡のなかに、

- ・竪穴建物は102棟検出、円形に配置（設楽2005）
- ・掘立柱建物は73棟検出、独立棟持柱建物・掘立柱建物の多数検出は南関東で初例
- ・井戸6基、土坑882基など

○遠隔地との交流があったことを示す遺物が多数出土

- ・東部瀬戸内系、東海系、北関東系・武蔵系、中部・北陸・南東北系土器

○関東では稀少例である二上山サヌカイト製打製石剣（畿内式打製尖頭器）出土

(3) 大井町中屋敷遺跡の概要 (第8図)

- 弥生時代前期後葉の土坑から炭化種子出土
 - ・アワが多数、イネが続く、キビも少量 (年代測定で弥生前期後葉(前4世紀後半~5世紀前半))
- 土偶形容器の出土
 - ・人骨の出土、再葬墓、祖霊祭祀

3 近畿から南関東の弥生文化について考える

(1) 近畿から南関東への水田稲作の伝播に「海の道」は重要な役割を果たした

- 東部瀬戸内から中里遺跡へは海の道を経由したか? (第9・11図 杉山2019)
 - ・和歌山県瀬戸遺跡 弥生時代前期に東北起源の屈折像土偶出土 (第12図)
 - ・和歌山県立野遺跡 弥生時代前期に東部瀬戸内系、東海系、関東系の土器が出土
- 水田稲作など人・モノ・情報の伝播に海路は重要な役割
 - ・交通の難所には「海」の知識が必要 例えば紀伊半島潮岬には「振り分け潮」発生 (第10図)
- 中里遺跡の成立に東部瀬戸内からの移住はあったのか
 - ・東部瀬戸内系土器はあるものの東海系土器より少ない、基本は在地系 (石川2001)
- もちろん、「陸の道」も存在した (第13図)

(2) 水田稲作の受容

- 北部九州での水田稲作の受容
 - ・北部九州でも水田稲作が河川の下流域から中流域に広がるまでに約300年かかった
 - ・縄文困窮説→豊かな縄文、水田稲作が伝播してきてもすぐに受容したわけではなかった
- 神奈川県域の稲作のはじまり
 - ・第1波 弥生前期後葉 コメの伝播 (陸稲?) (中屋敷遺跡)
 - ・第2波 弥生中期中葉 遺跡立地から水田稲作の伝播 (中里遺跡)
石包丁を使用しないのは東海以東の水田稲作の「規範」
- 水田稲作をめぐる二つの評価
 - ・水田稲作は生業の中心だとする見解、前者を「水田単作史観」と批判的な見解
鳥形木製品 (第15図) は関東では千葉県常代遺跡で出土するも銅鐸はない
西日本の農耕神話に南関東の縄文時代以来の世界観のなかで独自の祭祀があったか?
*ちなみに、弥生文化博物館では農耕祭祀情景を復元 (第14図)

(3) 環濠集落の出現

- 環濠集落は韓半島から、弥生時代早期に伝播
 - ・前期に東方伝播、中期中葉には関東にも伝播、中期後葉は南関東弥生社会の成立期
- 環濠の機能は?
 - ・土塁の可能性を最初に指摘したのは大塚遺跡だった (第16図)
外側に積むのは土を置きやすかったから…必ずしも防御とは言えない
 - ・環濠断面から考えられることは (第17図)
弥生早期・前期の北部九州の環濠断面はV字形と逆台形、幅広く深い
変容しながら東方に伝播

(4) 独立棟持柱建物の役割 (第18~23図)

- 近畿の独立棟持柱建物 (一部、大型掘立柱建物含む)
 - ・①区画をもつもの、区画をもたないもの
 - ・②同じ場所で建て替えるもの、一時期のもの (→移動するもの)
 - ・③他の遺構のないところに位置するもの、他の遺構の上に位置するもの
 - ・実は、大型掘立柱建物の検出例が増えるのは中期後葉から
中期中葉では中里遺跡の事例は大きい、井戸とセットの事例として稀少

- 畿内地域は独立棟持柱を持たないものも含めた大型掘立柱建物が「特殊」役割
 - ・ 絵画土器に建物が描かれる、建物及び周辺から特殊な遺物が出土
 - ・ 大型掘立柱建物は最高所あるいは微高地に立地することがある
 - ・ 方形区画を伴うものもある
 - ・ 土器や勾玉などが出土することがある
 - ・ 建物の性格としては、祭殿、神殿、集会場、実用的な建物（大型のものに伴う）
- 中里遺跡の独立棟持柱建物も微高地で同じ場所で建て替え
 - ・ 祖霊祭祀にかかわる施設（設楽 2009）

(5) 鉄器の出現

- 中期後葉には鉄器も出現（第 24～26 図）
 - ・ 砂田台遺跡 鉄剣を切断した板状鉄斧・鉈
 - ・ 権田原（ゴンツッパ）遺跡、下寺尾西遺跡などで板状鉄斧
- 鉄剣の切断はどこでおこなわれたのか（第 27 図）
 - ・ 弥生時代中期後葉には北部九州、瀬戸内地域で確実な鍛冶炉検出
 - ・ 近畿でも中期後葉には鉄器製作が始まっていた可能性
 - ・ 簡易な鍛冶行為は南関東でも始まっていたのか

4 弥生時代とは、弥生文化とは

- 年代遡及もあるが、やはり「灌漑水田稲作の受容」を指標でもいいのか（第 28 図）
 - ・ 時代区分の考え方（近藤 1985）
 - 特徴的で、重要で、普遍化していく考古資料
 - ・ 灌漑水田稲作は「急速に伝わらなかった」「階層分化を進めなかった」のに指標にできるのかという批判も聞こえてきそうだが…
 - ・ 水田稲作の伝播→水田稲作の受容
 - 「縄文人」がどのように水田稲作を受容したのか、受容後どのように展開させたのか
 - ・ 北部九州で水田稲作を受容するとそれ以外の地域もコメ情報が東方に伝播
 - 北部九州 灌漑施設を伴う水田稲作
 - 近 畿 北部九州と同じ水田稲作技術、祭祀は独自の造形物
 - 東北北部 弥生前期に水田稲作を受容するも後期には水田を放棄
 - 南 関 東 西日本とは異なる水田稲作技術（石包丁欠落）、祭祀も異なる
- 弥生時代の地域色を明らかにすることが求められる現在の弥生時代研究ではないか
 - ・ 北部九州を起点に始まった弥生時代、違いを認識することで個性豊かな「弥生文化」が展開
 - ・ 弥生時代とは？縄文時代との違い、古墳時代との違い
 - 縄文時代から弥生時代へは経済的な違い（水田稲作）
 - 弥生時代から古墳時代へは政治的な違い（墳墓）
 - 縄文時代と古墳時代の間に位置する弥生時代は、まさに「中間時代」
 - いろいろ「問題」はあるものの、今後もこれまでの延長で研究を継続するべきではないか

【主な参考文献】

- 石川日出志 2001 「関東地方弥生時代中期中葉の社会変動」『駿台史学』第113号 駿台史学会
- 石川日出志 2010 『農耕社会の成立』岩波新書
- 小林行雄 1938 「弥生式文化」『日本文化史大系』第1巻 誠文堂新光社
- 近藤義郎 1985 「時代区分の諸問題」『考古学研究』32-2 考古学研究会
- 設楽博己 2005 「東日本農耕文化の形成と北方文化」『稲作伝来』岩波書店
- 設楽博己 2009 「独立棟持柱建物と祖霊祭祀」『国立歴史民俗博物館研究報告』第149集
- 設楽博己 2014 「農耕文化複合と弥生文化」『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集
- 坪井正五郎 1889 「帝国大学の隣地に貝塚の跡有り」『東洋学芸雑誌』6-91 東洋学芸社
- 橋口定志・石川日出志・大西雅也・西山博章・小倉淳一・及川良彦・下條信行・寺前直人・西川修一・松木武彦・杉山浩平・中山誠二・浜田晋介 2020 「小特集 東日本弥生時代・文化研究「再考」 その是非を論じる」『東京考古』No. 38 東京考古談話会
- 禰亘田佳男 2020 「近畿における鉄器製作遺跡の「再発掘」」『新・日韓交渉の考古学—弥生時代—（最終報告 論考編）「新・日韓交渉の考古学—弥生時代—」研究会
- 浜田晋介・中山誠二・杉山浩平 2019 『再考「弥生時代」—農耕・海・集落—』雄山閣出版
- 藤尾慎一郎 2013 「弥生文化の輪郭 灌漑式水田稲作は弥生文化の指標なのか」『国立歴史民俗博物館研究報告』第178集
- 藤尾慎一郎 2011 『<新>弥生時代 500年早かった水田稲作』吉川弘文館
- 藤尾慎一郎 2021 『日本の先史時代』中公新書
- 松木武彦 2011 「弥生研究のゆくえ」『弥生時代の考古学』9 同成社
- 南川高志 2020 「21世紀の歴史学と時代区分」『思想』1149 岩波書店
- 村上恭通 2007 『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店
- 森岡秀人 2000 「弥生集落研究の新動向（V）—小特集「三重県における集落の様相」に寄せて」『みずほ』第34号 大和弥生文化の会
- 森岡秀人 2007 「弥生時代の中にみられる画期」『季刊考古学』100 雄山閣
- 山内清男 1925 「石器時代にも稲あり」『人類学雑誌』40-5 東京人類学会

【用語解説】

- 打製石剣** かつては「打製石槍」と呼ばれていた。形態から剣と考えられるものが多いが、中には戈としての機能をもつもの、柄をつけて槍として使われたものもあったと考えられる。機能を限定しにくいので、「畿内式打製尖頭器」と呼ぶ意見もある。報告者はその考え。
- 屈折像土偶** 縄文時代後・晩期の東北地方では座ったような姿勢をとる土偶のこと。祈りの姿勢あるいは民族例から座って出産する姿勢を表しているという意見もある。
- 鳥形木製品** 弥生時代、鳥は穀霊を運ぶ神の使いと認識されていたと考えられている。木製品には穴が開けられており、棒に突き刺して、農耕祭祀の際の祭場、あるいは集落のどこかに立っていたとされる。北部九州での出土は稀薄で、近畿から東海に分布の中心がある。
- 見えざる鉄器** 弥生時代後期の石器消滅の背景に、普及したと想定される鉄器のこと。とくに畿内地域では鉄器の出土数が少ないにも関わらず普及したことの根拠として重要視され、鉄器が出土しないのは、錆びてなくなったから、再利用されたからだと解釈されてきた。これに対しては、鉄器が錆びて完全に消滅することはない、畿内地域に再加工技術はなかったという反論がある。
- 棟持柱建物** 棟くむとは、建物のもっとも高い部分のこと。両方の妻の側柱外にあり、棟を支える柱のことをいう。棟を支える柱は、妻の内外に存在するので、側柱の外にあるものを独立棟持柱、内にあるものを屋内棟持柱と呼ぶこともある。報告者は後者に従う。



第1図 弥生町土器 (坪井 1889)



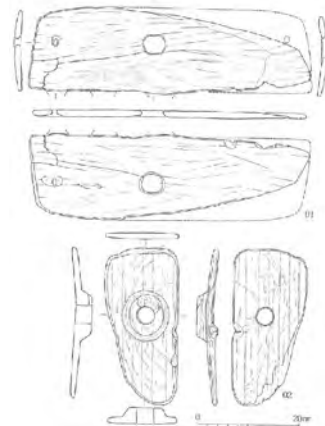
第2図 柵形罫遺跡の靱圧痕土器 (山内 1925)



第3図 弥生時代年代観の変遷 (藤尾 2021)



第4図 堰と水路を伴う水田跡 (板付遺跡)



第5図 木製農具 (菜畑遺跡)



第6図 大塚遺跡と歳勝土遺跡



第7図 中里遺跡 (設楽 2005)

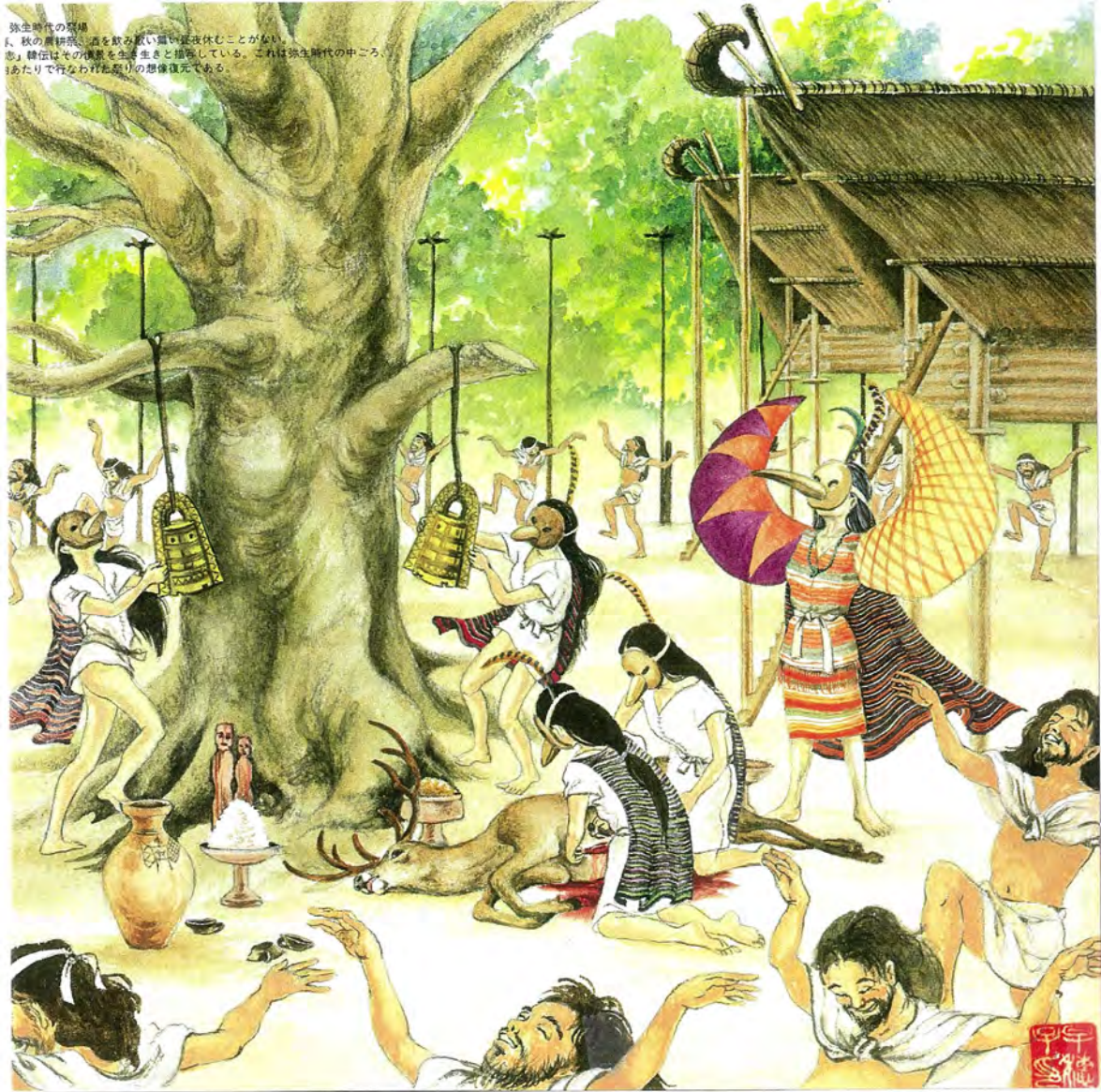
114 中里遺跡の全景 神奈川県小田原市中里遺跡の発掘調査区全景。竪穴住居が環状あるいは集塊状に群集し、それらが集まって集落をなしている。その真ん中には大型の掘立柱建物が建っている。



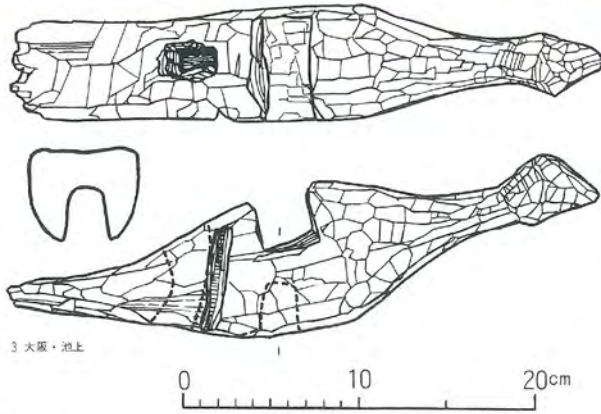
| 分類群・部位 | 第9号土坑 | | |
|------------|---------------------|--------|---------------|
| | 遺構・層位など 3層 (草本類堆積層) | 3層 | 炭化材焼土層 |
| イヌシヤ節 | 炭化果実 | 2 | 2 |
| クリまたはトチノキ | 炭化子葉 | 1 | |
| カラスザンショウ | 炭化種子 | 1 | |
| サルナシ | 炭化種子 | 3 | |
| トチノキ | 炭化種皮・子葉 | | |
| 堅果類 (トチノキ) | 炭化種皮・子葉 | | 少量 |
| イネ | 炭化胚乳 | 55(19) | 65(7) 273(78) |
| キビ | 炭化胚乳 | 11 | 15 |
| アワ | 炭化胚乳 | 595# | 3 1273 |

数は肉眼で取り上げられたものと、土壌洗浄によって得られたものの合計
数字は個数、()内は半分ないし破片の数、#は重量から換算した個体数を示す
炭化材焼土層は5kgを洗浄後、肉眼で抽出した試料と、2kg分についてその残渣を検討した試料の合計数

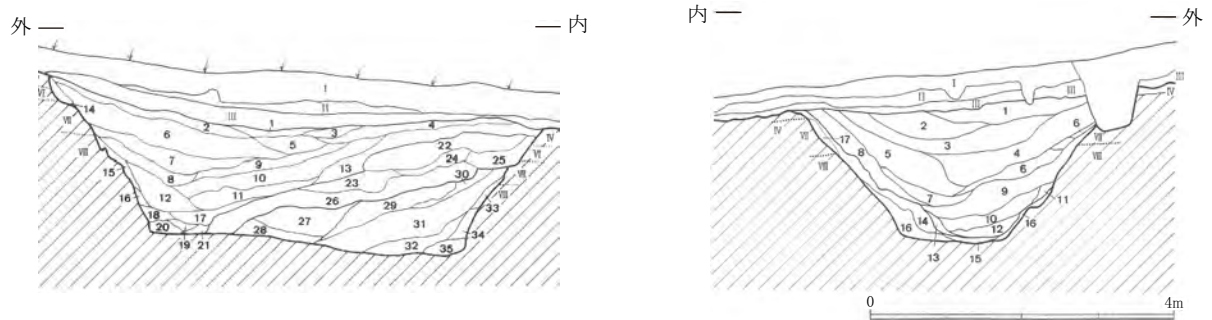
第8図 土偶形容器<左>・第9号土坑種実遺体出土数<右> (中屋敷遺跡)



第 14 図 祭場の復元

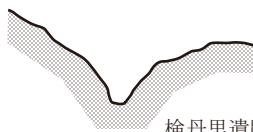


第 15 図 鳥形木製品（池上曾根遺跡）



第16図 環濠土層断面図（大塚遺跡）

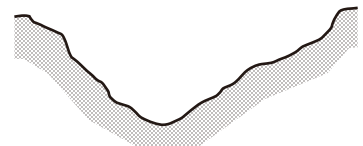
韓国



検丹里遺跡 1<韓国>

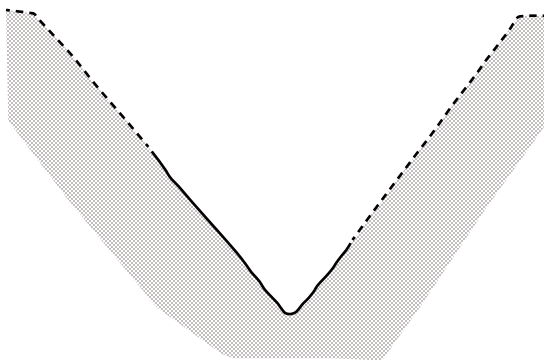


検丹里遺跡 2<韓国>



徳川里遺跡<韓国>

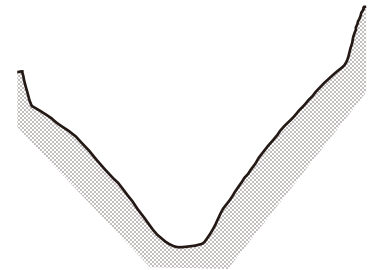
弥生早期・前期



那珂遺跡 (外環濠)<福岡県>



板付遺跡 1 (弧状溝)<福岡県>



扇谷遺跡<京都府>

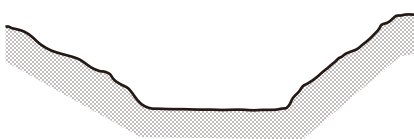


板付遺跡 2 (弧状溝)<福岡県>

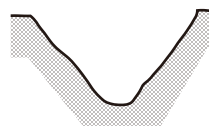


雲宮遺跡<京都府>

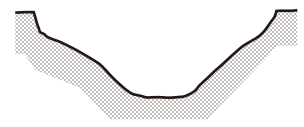
弥生中期



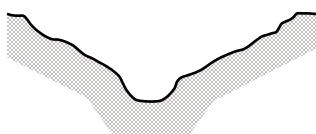
池上曾根遺跡 1<大阪府>



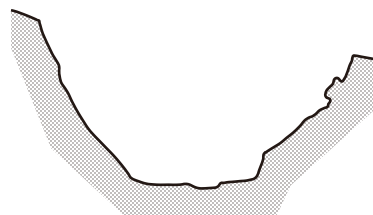
池上遺跡 1<埼玉県>



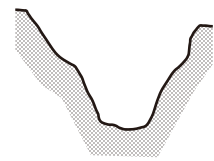
池上遺跡 2<埼玉県>



池上曾根遺跡 2<大阪府>



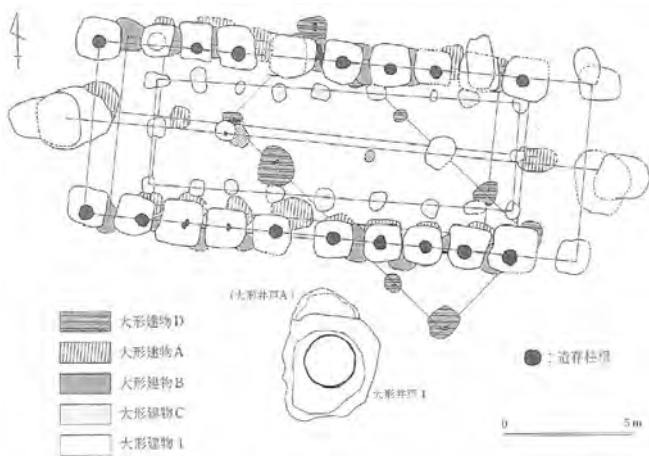
大塚遺跡 1<神奈川県>



大塚遺跡 2<神奈川県>

0 1:100 2m

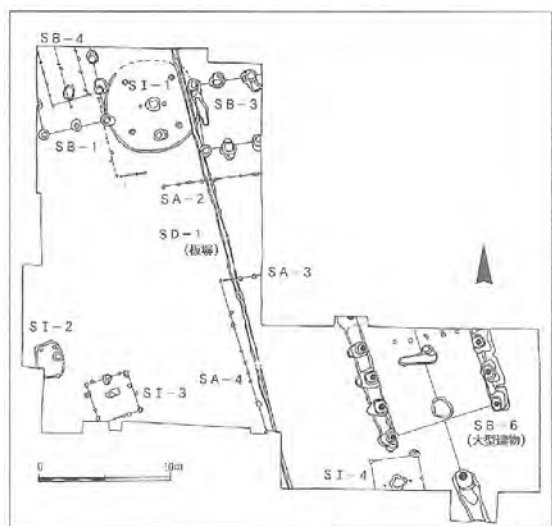
第17図 各地の環濠断面図



第18図 独立棟持柱建物（池上曾根遺跡）



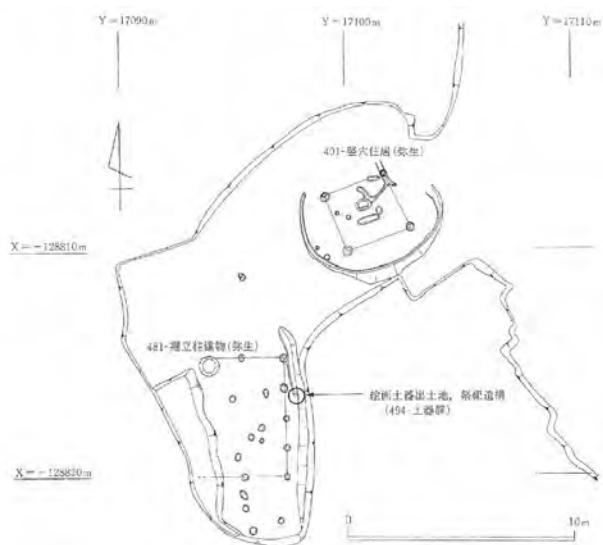
第19図 大型掘立柱建物（加茂遺跡）



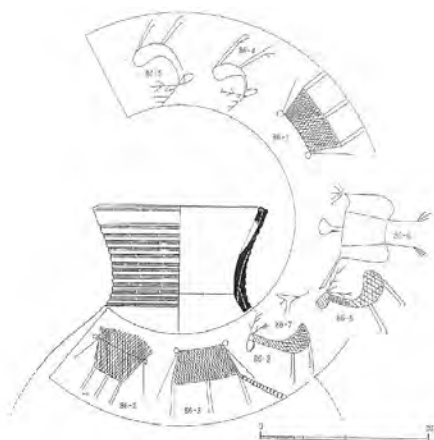
第20図 独立棟持柱建物等（武庫庄遺跡）

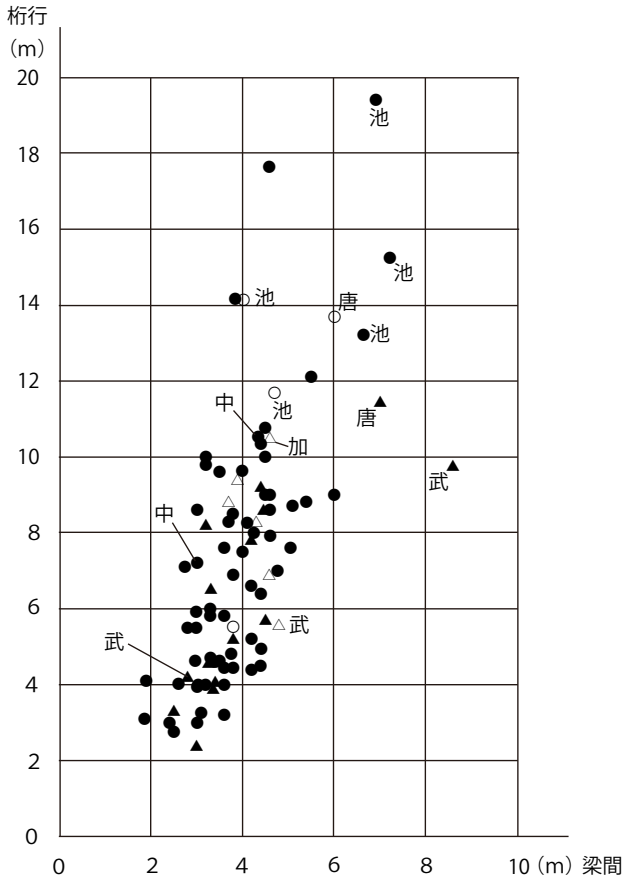


第21図 絵画土器（唐古・鍵遺跡）



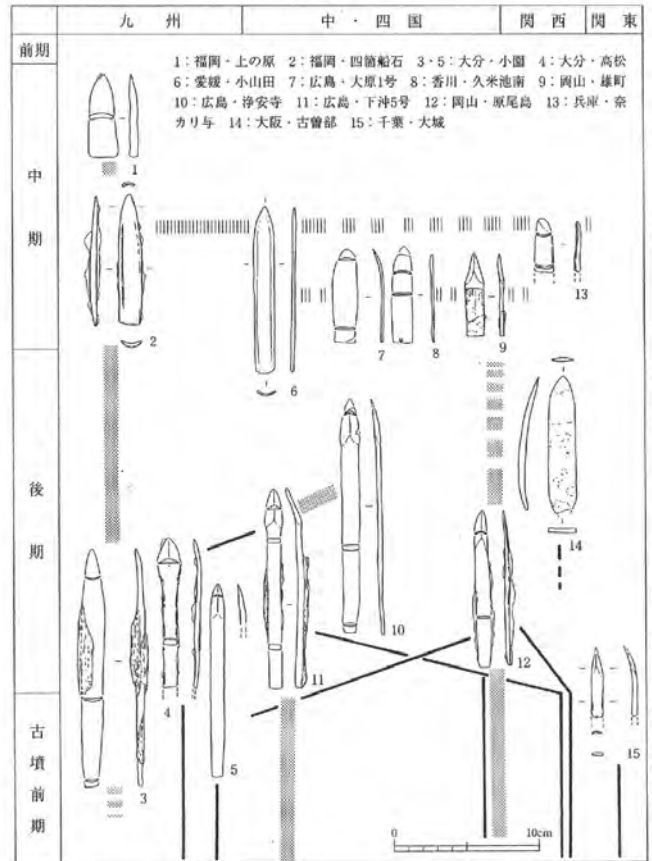
第22図 掘立柱建物と絵画土器（養久山前地遺跡）





(池：池上曾根遺跡，唐：唐古・鍵遺跡，加：加茂遺跡，武：武庫庄遺跡，中：中里遺跡)

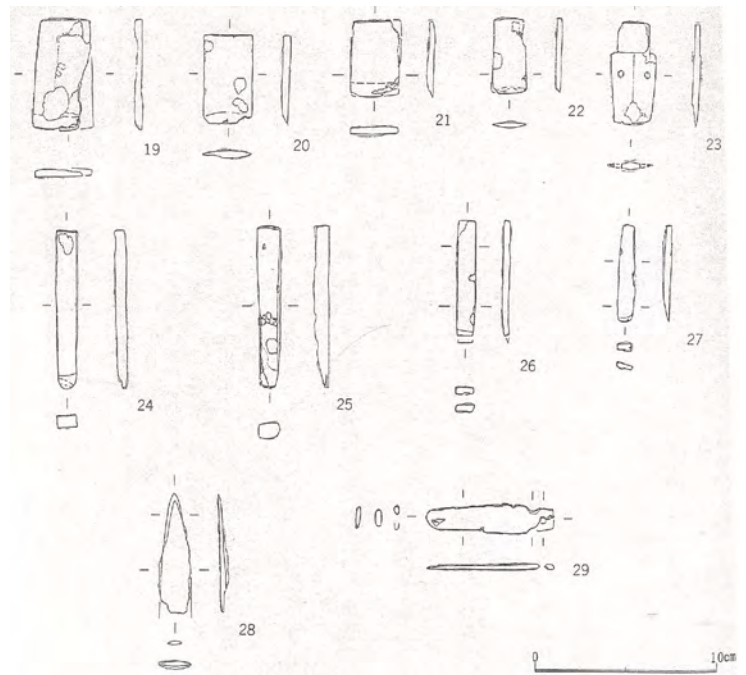
第 23 図 独立棟持柱建物等の規模



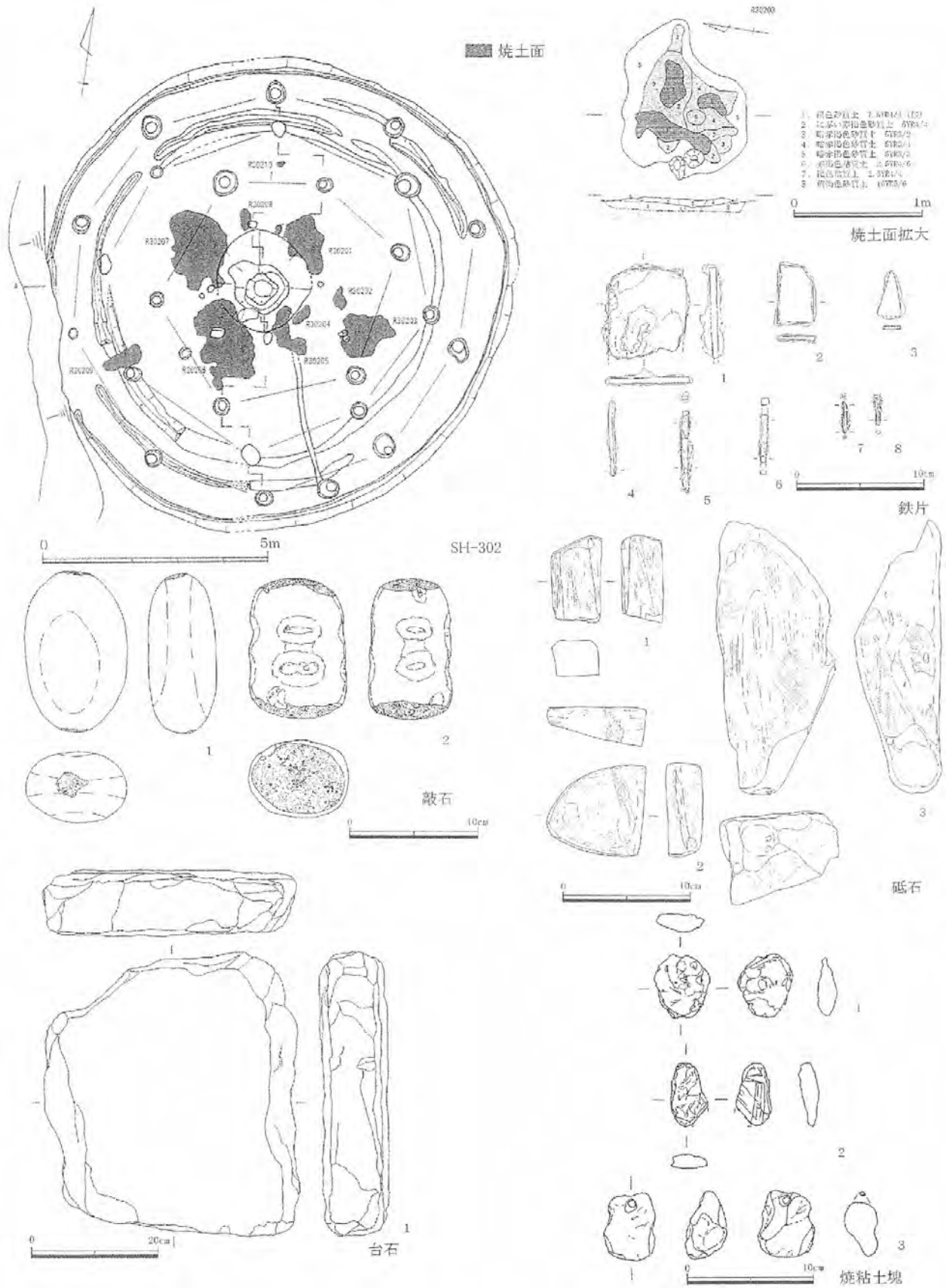
第 24 図 鉞の諸型式と展開 (村上 2007)



第 25 図 鉄鎌 (村上 2007)



第 26 図 鉄器 (砂田台遺跡)



第 27 図 鉄器製作遺構及び製作関係遺物実測図 (福宜田 2020)

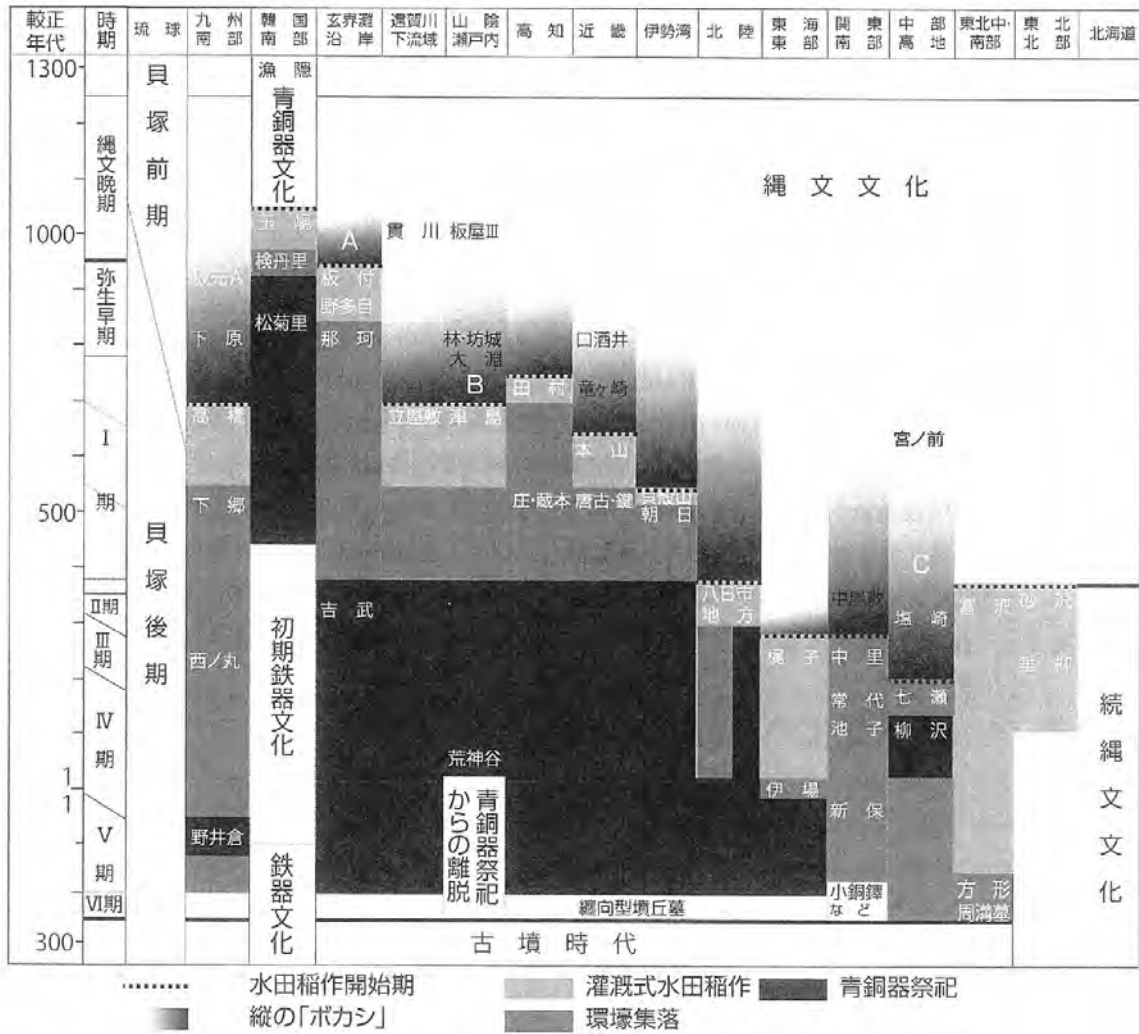


図3 弥生文化の三要素の時期別地域別分布

図3の説明
 この図は、藤尾 2000 を皮切りに、藤尾 2004 など、数度の改訂をへて今回に至っている。今回は、最新版の藤尾 2011 に修正を加えたので、その根拠と改正点を記す。中部以東は、中山 2010、石川 2010 より引用。

- 沖縄 貝塚前期と後期の境を、黒川式から高橋Ⅱ式までの間とした(木下尚子氏教示)
- 九州南部 縄文水田として都城市坂元 A 遺跡を追加。丹塗り磨研土器を出土した南さつま市下原遺跡を追加。環壕集落として鹿屋市西ノ丸遺跡(山ノ口式)と宮崎市下郷遺跡(前期後半)を追加。宮崎ではこれ以降、環壕集落が継続して営まれる。宮崎県の状況について柴加光博氏から教示を得た。
- 遠賀川下流域 石廬丁を出土した北九州市貫川遺跡を追加。
- 山陰 突帯文土器(前池式)の胎土中からイネのプラント・オパールが見つかった板屋Ⅲ遺跡を追加。
- 瀬戸内 丹塗磨研土器や石廬丁を出土した松山市大淵遺跡を追加。
- 高知 田村遺跡を前 8 世紀末に位置づけた。歴博調査
- 徳島 庄・蔵本遺跡を前 6 世紀に追加 [藤尾他 2010]。
- 神戸 本山遺跡を前 7 世紀に位置づけた。歴博調査
- 奈良 唐古・鍵遺跡を前 6 世紀に位置づけた。歴博調査
- 滋賀 長原式の土器附着炭化物からキビが見つかった竜ヶ崎 A 遺跡を追加。歴博調査
- 東海 東海を東海東部に改称した。
- 静岡 木製農具を出土した静岡市梶子遺跡、V 期の環壕をもつ伊場遺跡を追加。
- 中部高地 木製農具が出土した長野県七瀬遺跡を追加。前期の非灌漑水田が見つかった山梨県宮ノ前遺跡を追加。
- 群馬 V 期の木製農具を出土した新保遺跡を追加。
- 北信 大陸系磨製石器がセットで出土した長野県塩崎遺跡を追加。
- 南関東 IV 期の木製農具を出土した千葉県常代遺跡、神奈川県池子遺跡を追加。
- 石川 III 期の環壕集落である八日市地方遺跡を追加。

第 28 図 弥生文化の地域性

